様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０６５４

研究課題名（和文）相互行為の組織のための触覚的資源ー身体接触を伴うコミュニケーションの会話分析

研究課題名（英文）Tactile Resources for the organization of interaction

研究代表者
西阪　仰（Nishizaka, Aug）

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：８０２０８１７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：相互行為の組織のためには，言語的資源以外にも，様々な資源が利用される．相互行為研究にビデオが用いられるようになったあと，言語的資源（音声的資源）とともに，多様な視覚的資源が研究対象となってきた．本研究では，とくに触覚的資源について，その体系的記述と分析方法の確立を目指した．次のような知見が得られた．①複合活動状況において，異なる活動に異なる資源様式が体系的に配分されること，②発話の統語的構成と触覚的資源の利用が相互に関与し合うこと，③相互行為のなかで触覚的特徴を直接「見る」ことがあること，④それゆえに，ビデオ分析により，研究者も参加者の触覚的資源に接近可能であること，以上である．

研究成果の概要（英文）：Various modalities of resources are employed in the organization of interaction. Since the introduction of video to interaction studies, the ways in which participants employ visual resources, as well as linguistic (or auditory) resources, have been intensively explored. In this research project, we aimed to provide systematic descriptions of uses of tactile resources and the methodological grounds for such descriptions. We found that: 1) in multiactivity situations, modalities of resources are differentially distributed to distinct simultaneous activities; 2) syntactic constructions of utterances and tactile orientations inform each other; 3) participants can directly “see” tactile features in interaction; and 4) such intersensory perceptions provide methodological grounds for analysts to access participants’ tactile orientations through the viewing of videos.

研究分野：社会学

キーワード：会話分析　相互行為　触覚　複合感覚　位置感覚　運動感覚

１．研究開始当初の背景

(1) 触覚的知覚（触知）については，アフォーダンスの理論で知られる J. J. ギブソンが 1960 年代に実験心理学の立場から独自の研究を行なった．触知そのものの研究は，視覚等他の知覚の研究と融合し，身体の動きを個体と世界とのかかわりの中心に据える知覚モデルが出現する．一方，今日もなお，2 次元の網膜像が神経系により再構成され 3 次元空間の経験が産出されるという認知主義的視覚モデルが盛んであるが，すでに 1950 年代にメルロ=ポンティは，「空間の厚み」を生きることを視覚の可能性の端緒におく，独自の考えを提示していた．知覚の本来の場所である日々の活動を具体的に分析することにより，ギブソンやメルロ=ポンティの示唆した方向を社会学の課題として前に進めようというのが，研究代表者のこれまでの研究の 1 つの大きな柱だった．

研究代表者の依拠する方法的態度は，「会話分析」である．会話分析は，その研究にビデオ録画が導入されて以来，言葉だけではなく，身振りや手振り，視線の動きなどが，相互行為の組織のための重要な資源となっていることを明らかにしている．言語的資源のみでなく，様々な音声的・視覚的資源が複合的に配列されることで，相互行為が体系的に生み出されていくことが，とくに C. グッドウィンらの先駆的研究によって明らかになった．

しかし，触覚的資源は，とりわけ身体接触を伴う相互行為において，明らかに重要な資源であるにもかかわらず，いまだ体系的な研究の対象となっていない．触覚的資源には，触れる／触れられることから獲得される多様な知覚・感覚が含まれる．

確かに，いくらビデオを眺めていても，相互行為参加者たちの触覚的な感覚を，研究者が感じることはできない．しかし，かれらがなにを感じ，その感覚が相互行為のなかでどのように用いられているかは，かなり明確に見る（あるいは聞く）ことができる．実際，これまで，研究代表者自身のものも含め，触覚的資源に特化した次のような会話分析研究がなされている．① 身体の一部を指すのに，触覚的資源がどう用いられるか．医師や助産師が触診や超音波検査において，妊婦の身体に触れながら，「ここが～」と説明する場合など．② 学習者へのインストラクションのために，触覚的・運動感覚的資源がどう用いられるか．インストラクターが学習者の手をとって，「こうする」と教授する場合など．③ 触覚的感覚が相互行為の焦点としてどう用いられるか．医師が検診において患者の患部に触れて痛みの度合いを尋ねる場合など．

(2) 研究代表者は，2002 年以降，産婦人科医療における相互行為について集中的に研究を行なってきた．そのなかで，相互行為のための触覚的資源の重要さを指摘してきた．

また 2011 年以降は，おもに 2 つのフィールドを扱ってきた．1 つは，東日本大震災および福島第 1 原発の爆発事故後の，避難住民とボランティアとのあいだの相互行為の研究である．とくに「足湯」と呼ばれるボランティア活動（避難住民の足を湯に浸し，手のマッサージをしながら，会話を行なう活動）における相互行為をビデオに収録し，分析を行なった．もう 1 つのフィールドは，在宅マッサージである．訪問マッサージにおける施術者と利用者（「患者」）の相互行為をビデオに収録し，分析を行なった．いずれも，典型的に身体接触を伴う相互行為であり，いずれにおいても，身体接触はコミュニケーションのあり方と本質に関係している．この 2 つのフィールドについて，本研究以前は，あくまでも言語的資源が分析の焦点となっていたが，本研究においては，触覚的資源について踏み込んだ分析がなされることになる．

２．研究の目的

以上を踏まえ，本研究では，相互行為の組織のための触覚的資源について，(1) その体系的記述と，(2) 分析方法の確立を目指した．

(1) 言語的および身体的振舞いのタイミングなどを詳細に検討することにより，参加者たちは，触覚的資源（触れる／触れられることによる感覚・触覚的情報［触知］など）を実際どう用いて相互行為を組織しているのか，その（参加者自身の）手続きを体系的に記述する．

(2) ビデオ・データの分析により，触覚的資源の用いられ方はどのように分析できるか，その方法を体系的に記述する．例えば，ある相互行為参加者が他の参加者に触れたとき，後者はなんらかの身体的もしくは言語的な反応をするかもしれない．そのような反応のなかに，会話分析の手法によって，その（最初の）接触行為に関する，参加者自身の様々な理解を捉えることができるはずである．この「理解」を捉えるための方法を，体系的に考察する．

３．研究の方法

本研究の方法は，会話分析（conversation analysis）である．会話分析は，人と人との相互行為が独自の秩序を持つことを出発点する．そのうえで，その秩序を，単に外部から観察して見て取れるような経験的な一様性（パターン）ではなく，その秩序の内部にある当事者たちによって，体系的・組織的・方法的なやり方で産出されるものと捉える．会話分析は，まずは実際の相互行為を録音もしくは録画し，そこで起きていることを詳細に記述しようとする．そのなかで，その秩序産出の組織的なやり方が，きわめて精巧なも

のであることを明らかしてきた．

会話分析は，もともと，言語的資源が相互行為の組織のためにどう用いられるかを研究してきた．言語のやりとりでは，1 人ずつ順番に発言する．個々の発言順番の構成をつぶさに分析するならば，その発言者が，先行する発言順番をどう理解したか，あるいは，相互行為の現在の展開についてどのような理解を持っているかが明らかになる．

触覚や触知についても，同様の分析が可能なはずだ．当人たちがそのつど何を感じているかは，必ずしも本人にしかわからないわけではなく，様々な言語的・非言語的ふるまいの構成のなかに表現されるにちがいない．

４．研究成果

(1) 複合活動の組織と触覚的資源

私たちは，しはしば，1 つの相互行為のなかで，複数の活動を同時に行なう．例えば，妊婦の定期健診における超音波検査では，検査のあいだに，助産師や医師から様々なアドバイスがなされるし（論文⑫），あるいは，震災後の避難所・応急仮設住宅において行なわれた「足湯ボランティア」においては，手や腕のマッサージがなされるあいだに，様々な話題についての会話がなされる（論文⑧）．このような事態を「複合活動」状況と呼ぶことができるだろう．

複合活動状況は，これまでの研究を踏まえて，次の 3 つのタイプに分けることができる．①4 人以上が居合わせているとき（一緒に食事をしているときなど），会話が分裂することがある．すなわち，複数の会話が，1 つの相互行為機会において同時進行する．②複数の相互行為参加者が，別のことをそれぞれ同時に行なって 1 つの活動を達成することがある．例えば，1 つの飛行機を操縦する操縦士と副操縦士は，まったく異なることを同時に行ないながら，目的地への飛行を達成する．③1 人の参加者が異なることを同時に行なう．上に挙げた 2 つ（健診と足湯）は，この最後のタイプの例である．

複合活動の研究として最も蓄積のあるのは，第 2 のタイプについてである．しかし，本研究課題に最も関連があるのは，第 3 のタイプである．1 人の参加者が同時に異なる活動に従事できるとしたら，それは，その異なる活動に異なる様式の相互行為資源が配分されているからにほかならない．足湯の場合であれば，マッサージは触覚と視覚によってなされるのに対して，会話は，言語的資源によってなされる．超音波検査の場合であれば，検査は，視覚的資源（超音波モニターの視覚的諸特徴）と触覚的資源（超音波送受信器具［プローベ］を腹部に当てることから得られる触覚的諸特徴）に依拠するのに対して，アドバイスは，言語的資源によって達成される．だから，この異なる資源が，それぞれ異なる活動の組織のために配分されているかぎり，1 人の参加者が同時に複数の活動に従事することは可能である．

しかし，2 つの活動は相互に無干渉であるわけではない．例えば，超音波検査の進行に合わせて，発話がよどむ，発話の連鎖が中断する，などの現象が観察できる．あるいは，マッサージをスムーズに進行されるために，言葉による指示・説明が必要なこともある（「手を裏返します」など）．このような現象の分析により，以下の知見を得ることができた．

第 1 に，同時進行する複数の活動は，基底的か従属的か，および，優先的か非優先的か，という 2 つの軸で特徴付けることができる．足湯の場合，マッサージは，基底的であるが非優先的であり，会話は従属的であるが優先的であると特徴付けることができる．

第 2 に，マッサージは，特定の部位から次の部位へと移っていく（指，手のひら，前腕，上腕，など）．1 つの部位のマッサージは，参加者たちにより 1 つのマッサージ・ユニットと捉えられている．このユニットと会話のユニットが一致するよう，両方の活動が調整される．会話が 1 つのマッサージ・ユニットに収まるよう，マッサージ・ユニットが拡張されることが，しばしば観察できる．それぞれのユニットの終了が一致するよう，マッサージ・ユニット間の「移行領域」において，微細な調整が行なわれる．

(2) 発話の統語的構成と触覚的志向

1 つの活動が，言語的資源と触覚的資源の両方によって組織されることもある．在宅マッサージの（上述の）データコーパスのなかから，（食べ物や趣味に関する発話ではなく）何らかの形で施術にかかわる，施術者の発話を，200 ほど取り出した．それは，利用者に対し次の施術のための指示（インストラクション）を与えている発話のこともあれば，次の施術を宣言する発話のこともある．これらの発話について，①その統語的形式と，②施術が開始される時点とを検討した（論文⑥）．

統語的形式は，次の 4 つのタイプに分類できる．それぞれ，「ください」，「ましょう」，「ます」，「いきます」を，末尾に伴う形式である．この 4 つの形式と施術の関係について，いくつかのことが観察できる．例えば，指示であることを，最も明確に表現する「ください」形式は，施術そのものではなく，施術に必要な姿勢を整えるのに用いられる．例えば，「手を上に伸ばしましょう」と言えば，手を伸ばすことが施術（運動）を構成するのに対し，「右側を下に寝てください」と言うときは，寝ることは施術の一部ではなく，左側をマッサージするのに必要な姿勢である．

最も際立っているのは，「ます」形式と「いきます」形式の違いである．指示の場合も，宣言の場合も，「ます」形式が用いられるときは，その発話の開始近くで，（その発話で言及されている）当の施術がすでに開始され，その施術の最初の区切りは，その発話の終わ

り近くに現われる．それに対して，「いきます」形式が用いられるときは，当該施術は，その発話の終わり近くで開始される．

このことに気づくことによって，いろいろなことがわかる．例えば，次の事例の 01 行目の施術者の発話は，「いきます」形式を取っている．にもかかわらず，そこで言及されている（足を上にあげる）施術は，その発話と同時に開始される．つまり，上で述べたパターンと一致しない．しかし，施術者は，02 行目で，いったん，足を上げる動きを止め，痛みについて質問を行なう．

（事例で用いている記号：| 動作の開始および終了時点，もしくは動作の生起時点；-->> 動作の，行をまたがっての継続；--> 動作の終了）

〔事例 1〕

01 施：|足を上にあげていきま↓す↑ね:::
施：|足を上げる ---------->>

図 1

↓

02 施：.hh| 痛↑み::は ありま↓すかね hh
施：-->|足を上げた姿勢を
そのまま維持する．

03 利：°まだない．°

04 施：|大丈夫ですか::?
施：|足をさらに前方に押す．

施術者は，02 行目で痛みについて（「痛くないですか」でなく）「ありますか」と聞いている．つまり，その問いは，「ある」という答えが同意になるように，すなわち，「ある」ことへの傾きを持つ形で，組み立てられている．実際，利用者は 03 行目で否定的に答えるとき，「まだ」を付け加えている．つまり，これから痛みが生じる可能性を示唆している．施術者は，痛くないことを確認しながら（04 行目），さらに足を押していく．

この事例は，一見，先に述べたことの逸脱例のようでもある．しかし，このように分析してみると，足を最初に上げる動きは，じつは，04 行目の動きのための予備的な動作であり，当該施術の核心 は，あくまでも 04 行目（以降）の動きであることがわかる．

以上から，次のように言えよう．施術にかかわる発話がどのような統語的形式を取るかにより，利用者は，その言及された施術のために，自分がどの時点でどのような身構えを取るべきかの情報を得ることができる．とりわけ，その発話とともに，施術者が何らかの動きを開始するならば，利用者は，その動きが，言及された施術との関係で，どのように位置付けられるべきものなのかを，知ることができるだろう．それに合わせて，利用者が特定の身構えを取るならば，利用者の身体に触れている施術者は，利用者が当該施術と現在の動きに対してどのような理解を得ているかを，知ることもできるだろう．それにより，発話の構成も影響を受けうる．このように，施術者と利用者の，身体を介したやりとりのなかで，一方で発話の統語構造と，他方でその発話と同時に，あるいはそのあとに生起する様々な動作とは，微細なやり方で互いに調整される．施術はこのような調整を通してなし遂げられていく．

(3) 身体の構造的配列と複合感覚的知覚

これまで，相互行為における触覚的資源がどのように用いられるかについての，体系的な記述を試みてきた．この節で紹介するのは，触覚的資源の体系的記述ではない．が，それでも，触覚・触知と決して無関係ではない現象，すなわち，自身および相手の身体の知覚についての知見を紹介したい（論文②④）．次の事例は，バイオリンの教師（T）が子ども（C）に，直前の子どもの奏法のどこがよくなかったか，説明しているところである．

〔事例 2〕

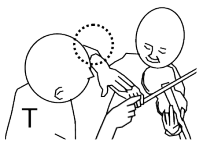

図 2

↓

01 T：|うごいてるの． |おぼえた::?
t：|左肘を高く掲げながら，左手で子ども
の腕をたたく．->|

02 (0.4)

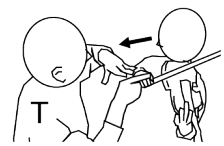

図 3

↓

03 T：|こうゆうふうに 動いて↓た °から°|
t：|左腕を子どもの右腕のうえに掲げ，|
右手で弓を前後に動かす． ----->|

04 |(0 . 8)
t：|子どもの右肘に軽く触れる．

01 行目で教師は左手で子どもの右腕を軽く叩きながら，以前学習したことの想起を促している（発話の構成は少し乱れているように見える）．すでに，子どもの右腕（弓を動かす腕）の「動き」に焦点が絞られている．同時に，教師は，自らの左腕を高く掲げることで，子ども実際の腕の位置の「低さ」を際立

たせている．03 行目では，その左腕を子どもの右腕の上に高く掲げたまま，右手で，実際に弓を前後に動かす．03 行目の「動いていたから」という言い方は，2 つの点で特徴的である．第 1 に，最後の「から」により，理由説明であることが明確にされている．つまり，なぜいまここで（演奏を中断して）この教示がなされているかの理由として聞くことができる構成になっている．第 2 に，「いた」と過去形を用いることで，子どもが実際に行なっていた動かし方の例示がなされていることも，明確にされている．

このような身体動作と発話の配列のなかで，教師が弓を動かすとき，そこで示されているのは，弓の動きそのものではなく，それより引き起こされる，子どもの右腕の動きである．肘を下げ，前腕だけを動かす弾き方が，掲げられた教師の左腕と対照化され，誤った動かし方として提示される．このように，1 つ動作の意味は，身体と言葉の構造的配列のなかで構成される．

そのあと（事例 3），教師は，その左手で自らの右肘に触れながら（図 4），正しい動かし方の実演（デモンストレーション）を行なう．その腕の動きを見ていた子ども，すぐに自分の肘を上げて，弓を弦の上に置く（図 5）．（「わん わん」は，4 分音符を表わしている．）

〔事例 3〕

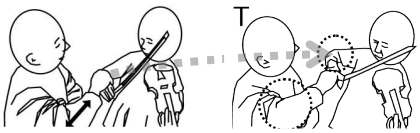

図 4　　図 5

```
      ↓          ↓
01 T: わん  わ|ん  |わん
   t: ----------->|
   c:            |右肘を上げて，弓を
                  バイオリンの上に置く．
```

まず，2 つの点を指摘しておこう．第 1 に，教師の実演は，それに先立って，左腕が高く掲げられていたことと，時間軸上で併置されることによって，正しい動きとしての意味を獲得する．第 2 に，子どもは，その教師の腕を見ながら，自分の肘を際立った形で上げることにより，すなわち，教師の腕（肘）と自らの腕（肘）とを空間的に併置することにより，自らのその動きを「（実演に従った）修正」として構成する．ここでも，個々の身体動作の意味は，身体の構造的配列のなかで達成される．

関連して，次の点にも触れておきたい．子どもは，教師の実演に何を見ていたのか．それは，「腕の動かし方」にほかならない．決して「教師の腕の動き」ではない．実際，子どもは，自分の腕の動きと教師の腕の動きを照合することなく，教師の実演を見たすぐ次の瞬間に自らの肘の高さを「修正」する．言い換えれば，子どもは，教師の実演のなかに，自身の身体の位置感覚・運動感覚を「見た」と言うこともできよう．

研究代表者自身が，2007 年の論文で示したように，腹部を触れながら行なう，身体上の特定位置の指し示しは，触覚的資源と視覚的資源が統合された形で達成される．この意味で，この指し示しは複合感覚的である．しかし，もっと強い意味での複合感覚的知覚がある．すなわち，その知覚に参与する感官器官は視覚器官だけであるにもかかわらず，触覚的特徴を，私たちは「見る」ことがある（メルロ=ポンティが指摘したように，私たちは，ガラスに触れることなく，ガラスの硬さを見ることができる）．このような複合感覚的知覚を，メルロ=ポンティにならって，「相互感覚的」と呼ぶこともできよう．事例 3 において，子どもが，位置感覚・運動感覚を「見た」というのも，このような相互感覚的知覚の例にほかならない．

(4) 方法への含意

最後に，研究目的の 2 点目にかかわることを述べておこう．いま述べた相互感覚的知覚が可能であるならば，この可能性は，ビデオを見る分析者にとって，重要な分析的資源となりうる．ビデオを見るときは，音声的および視覚的感官器官に頼る以外にない．しかし，私たちは，相互行為参加者たちが，何を感じているかを，端的に「見る」ことができる．

実際，事例 1 において，施術者が，利用者の足を上げていくとき，02 行目における足の位置で，利用者がどのくらいの痛みを感じうるか（実際にどう感じたかではなく，可能性として）を，ビデオを通して，私たちは見ることができる．かくして，相互行為のビデオ・データの分析により，視覚的・言語的・音声的資源に限定されない，多様な相互行為資源の研究が可能となるための，方法論的基盤を得ることができたと言えよう．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

①Nishizaka, Aug. 2017. The moral construction of worry about radiation exposure: Emotion, knowledge, and tests. *Discourse & Society*, 28(6)［掲載確定］．査読有

②Nishizaka, Aug. 2017. The perceived body and embodied vision in interaction. *Mind, Culture, and Activity*, 24(2): 110-128. 査読有

③西阪仰．2017.「知識と心配の道徳性―内部被ばく検査報告を語ること／聞くこと」岩上真珠・池岡義孝・大久保孝治編『変容する社会と社会学』学文社（pp. 101-123）．査読無

④西阪仰．2016.「身体の構造化と複合感覚的視覚: 相互行為分析と『見ること』の社会論理」荒畑靖宏・山田圭一・古田哲也編『こ

れからのウィトゲンシュタイン―刷新と応用のための 14 篇』リベルタス出版（pp. 202-219）．査読無

⑤ Nishizaka, Aug. 2016. The use of demo-prefaced response displacement for being a listener to distressful experiences in Japanese interaction. *Text & Talk*, 36(6): 757-787. 査読有

⑥ Nishizaka, Aug. 2016. Syntactical constructions and tactile orientations: Procedural utterances and procedures in massage therapy. *Journal of Pragmatics*, 98: 18-35. 査読有

⑦西阪仰．2015「相互行為における言葉のやりとり―適合配列・優先関係・共感」伊福部達・西阪仰他著『進化するヒトと機械の音声コミュニケーション』エヌ・ティー・エス（pp. 19-30）．査読無

⑧Nishizaka, Aug & Sunaga, Masafumi. 2015. Conversing while massaging: Multidimensional asymmetries of multiple activities in interaction. *Research on Language and Social Interaction*, 48(2): 200-229. 査読有

⑨Nishizaka, Aug & Hayano, Kaoru. 2015. Conversational preference." In Tracy, K., Ilie, C. & Sandel, T. (eds.) (2015). *The International Encyclopedia of Language and Social Interaction*. Boston: John Wiley & Sons. 査読無

⑩ Nishizaka, Aug & Hayano, Kaoru. 2015. Turn-taking." In Tracy, K., Ilie, C. & Sandel, T. (eds.) (2015). *The International Encyclo- pedia of Language and Social Interaction*. Boston: John Wiley & Sons. 査読無

⑪Nishizaka, Aug. 2015. Facts and normative connections: Two different worldviews. *Research on Language and Social Interaction*, 48(1): 26-31. 査読無

⑫Nishizaka, Aug. 2014. Sustained orientation to one activity in multiactivity during prenatal ultrasound examinations. In Pentti Haddington, Tiina Keisanen, Lorenza Mondada & Maurice Nevile (eds.), *Multiactivity in Social Interaction: Beyond Multitasking*. Amsterdam: Jon Benjamins. 査読有

⑬Nishizaka, Aug. 2014. Instructed perception in prenatal ultrasound examinations. *Discourse Studies*, 16(2): 213-242. 査読有

〔学会発表〕（計 5 件）

①Nishizaka, Aug. Non-present Machines in the Moral Construction of Worry. American Sociological Association. August 20-23, 2016. Seattle, USA.

②Nishizaka, Aug. The Structuring of the Body in Interaction. Keynote Lecture. The International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis. August 4-7, 2015. University of Southern Denmark, Kolding, Denmark.

③ Nishizaka, Aug. Normative Orientation in Sentential Construction of Procedural Instructions in Massage Therapy. American Sociological Association. August 22-25, 2015. Chicago, USA.

④Nishizaka, Aug. Tactility as a Resource for the Organization of Interaction. American Sociological Association. August 16-19, 2014. San Francisco, USA.

⑤ Nishizaka, Aug. Introducing a New Item through Response Expansion: An aspect of Topical Organization in an Interaction be- tween a Volunteer and an Evacuee. The 4th International Conference on Conversation Analysis. June 25-29. UCLA, Los Angeles, USA.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ：www.augnishizaka.com

６．研究組織

(1) 研究代表者
西阪 仰（NISHIZAKA, Aug）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：80208173

(2) 研究分担者
小宮友根（KOMIYA, Tomone）
東北学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：40714001

岩田夏穂（IWATA, Natsuho）
政策研究大学院大学・准教授
研究者番号：70536656

(3) 連携研究者
なし．

(4) 研究協力者
黒嶋智美（KUROSHIMA, Satomi）
日本学術振興会・特別研究員（千葉大学）
研究者番号：50714002

須永将史（SUNAGA, Masafumi）
立教大学・社会学部・助教
研究者番号：90783457

早野 薫（HAYANO, Kaoru）
日本女子大学・文学部・准教授
研究者番号：20647143

小室允人（KOMURO, Masato）
千葉大学大学院・大学院生